

[資料・その他]

養老事業にみる福祉思想 ～小樽育成院の歴史から～

大友 芳恵¹⁾，渡辺 啓太²⁾

1) 北海道医療大学看護福祉学部臨床福祉学科

2) 特別養護老人ホーム緑愛園

キーワード

福祉思想 社会事業 小樽育成院

序論

(問題の所在と研究の目的)

今なぜ、福祉思想というテーマを取り上げなくては
いけないか。

2020年度は世界中がコロナ渦の中であって、人々の生活に様々な変化をもたらしている。人々が安心した幸せな生活を送ることが出来る社会の転換期として危機を乗り越えるためには、社会の仕組みづくりはもとよりであるが、何よりも「利他的に思考する」社会が不可欠と考える。現在の危機を乗り越えるためには制度面の拡充のみならず、人間のより根源的な次元にまで遡った思想が求められるに至っているのではないだろうか。

今考えなければならないのは、利他的に行動する思考を作り上げる「思想」の再考なのではないのだろうか。

この「思想」の再考に際して、わが国の歴史を振り返ってみると、窮民への支援の歴史の中に、人権や社会正義に通じる福祉思想を見出すことができるのではないかとこの筆者の問題意識がある。

そこで、本研究においては、慈善、博愛の時代における、憐みや施し、慈しみ、惻隱の情といった心情を中心とする福祉思想から、さらに社会事業へと発展した明治・大正期時代の福祉思想に焦点をあて、社会福祉の「社会性」や「価値」について、福祉現場の経験的積み重ねの中にある社会福祉実践者たちの思想を再評価することから検討することを研究の目的とする。

(研究対象と研究方法)

北海道の社会事業の先駆けとして道を拓いた「小樽育成院（前身：小樽孤児院）」を研究対象とし、その歴史に通底する支援への思いや価値観を明らかにするために、主として『百周年記念誌』『110周年記念DVD』『百二十周年記念誌』の記録を資料とした。また内容の確認等を行うために理事長へのインタビューを実施

<連絡先>

大友 芳恵

北海道医療大学看護福祉学部臨床福祉学科

(2020年10月23日実施)した。また、研究に際して、日本社会福祉学会倫理規定を遵守して実施した。

I. 北海道の社会事業の萌芽

～北海道の福祉の先駆けとして道を開く～小樽育成院（前身：小樽孤児院）のあゆみ～

(1) 明治30年代の小樽の諸相

ここでは明治30年代以降の小樽の町の変化を概観し、小樽孤児院創設に至る社会状況について、記念誌と理事長の補足説明をもとに、沿革史をたどりながら社会事業のなかにみえる思想を検討していく。

明治30年代の小樽は、日本海に面した港町として発展し鯉御殿が建ち並び、手宮・札幌間の鉄道の開通により幌内炭山からの石炭輸送が始まり、小樽港と小樽の街は近代化に向かった。また、国内商業活動は勿論のこと、外国貿易にあっても進展はめざましく、日本銀行や三井銀行の各支店が建ち並び、「北のウォール街」と呼ばれるほどに大発展した。

しかし、日清戦争後の国内経済の停滞とともに、明治30年には道内の凶作から米騒動や小作争議が多発し多くの農漁民が困窮化した。そのため、街の各所に捨て子や孤児がみられるようになった。

記念誌¹⁾では明治30年代の小樽を以下のように述べている。

小樽育成院の前身、小樽孤児院が誕生した明治30年代の小樽は、激変する北日本随一の経済都市であった。驚異的な経済発展、爆発的な人口の増加の裏には、治安の悪化、風紀の乱れがつきまとっており、小樽市博物館で所蔵している小樽稲穂小学校校長の稲垣益穂による『稲垣益穂日誌』で当時の小樽の環境を嘆く記述がみられる。

「内地にも不良の生徒は往々あるが、これ程に賭博的精神は発達して居ぬ」

『稲垣益穂日誌』第8巻 明治36年4月20日（小樽市博物館1987）

「まだ仮名もろくろく覚えぬ乳臭字が早くも他人のポケットを捜すことを覚えて居っては実に堪るものではない」

『稲垣益穂日誌』第12巻 明治39年12月6日（小樽市博物館1988）

「必寛土地柄の然らしむる処で、何等土地に歴史が無く、隣家の制裁としては針の尖ほども無い土地で、然しも内地の失敗者、手あまし者、札附等、其土地に居り困しきものの逃げ込むに極めて便宜的な土地であるから止むを得ぬ。」（前掲書）

と繁栄の陰にある小樽の町の現状とその原因を急激に膨張する港町独特の環境に求めている。本州からの移民がまず上陸する港は小樽であり、その移民の職業別分類²⁾をみると、北海道への移民の数は1891（明治24）年前後に境に急増し、毎年5万人前後であった。1904（明治37）年の統計では、全道の移民の職業は52%が農業、続いて雑業17%、漁業10%と続き、「職業不詳」が10%である。これに対して、後志（小樽を含む）移民は、農業が31%、「職業不詳」35%ともっとも多い数字になっている。

まさに北海道にあらたな期待を持ち移民として訪れる人々があふれていたことがみてとれる。小樽が北日本随一の経済都市となったところ、1907（明治40）年に石川啄木が来訪しており、当時の小樽とそこに暮らす人々を描写した啄木の歌³⁾がある。

「悲しきは小樽の町よ
歌うことなき人の
声の荒さよ」

啄木の歌の意味を誤解する人もいるだろうが、啄木はその後帰京し、『胃弱通信』というエッセイの中で

「小樽人は歩行せず、常に疾駆す。
小樽の生活競争の激甚なる事ほとんど白兵戦にいたり」
「彼らは休息せず、又歌わず、又眺めず。唯疾駆し、唯喬進す。
疾駆する小樽人の心臓は鉄にて作りたる者の如し」

と表現している。この歌からは小樽港の活況あふれる物流や、銀行数の増加などのエネルギー的な小樽の町をうかがうことができる。

日本海に面した港町として発展した小樽は近代化に向かい、経済的な繁栄に導かれ小樽に導かれた移民等は成功をなすこともあったであろう。しかし、日清戦争後の国内経済の停滞とともに、繁栄の陰に、救済を必要とする人も多くあったこともうかがえる。

(2) 小樽孤児院の創設

新興の経済都市としての小樽は、その陰に救済を必要とする社会の一面を内包していた。まず、救済事業の一つであった小樽育成院の前身である小樽孤児院の創設の背景を整理してみたい。

『小樽の社会事業研究』（六）に記述されている小樽孤児院創設者の中島武兵は、岩手県盛岡出身の旧南部藩士で、孤児院創設以前は新聞記者として生計を立てていたが1898（明治31）年、捨て子の3人の男児を保護したことをきっかけに「小樽孤児院」を創設した。創設当時の男児は、3か月の乳児、3歳の幼児、10歳の少年であった。

もともと新聞記者であった中島がなぜ孤児院を創設するに至ったのであろうか。大正11年の北門新聞の取材記事⁴⁾「成績良好なる小樽育成院」のなかに創設者中島に関する記述がある。

「・・・此人は勿論学者でもなく又金持ちでもなく仁者でもない。明治30年頃まで、乃ち小樽孤児院が創設される迄は寧ろ一般から羽織ゴロ扱いをされて居た人で、随って一戸主であったとも言い難い境遇に居た。それが或年或事件に連座して札幌監獄に数カ月を送って以来心機一転し、何か世のために為る事業を営んで過去の生涯を潔めたいという心を起こして居た」

明治30年以前の中島は、新聞記者を名乗りつつも「羽織ゴロ」（立派な服装をしていながら、ごろつきのように恐喝を行う者）扱いをされ、まじめな新聞記者とは言い難い様子であった。しかし、ある事件に連座して札幌監獄に数カ月間収監されて以降、前半生を「潔める」ために、世のために尽くしたいという思いを強く持っていた。中島が育児事業を選んだのは、岡山孤児院を創設した石井十次の働きに感銘を受けたためと言われる。

明治31年6月、米穀他5品目取引所の裏に捨てられていた孤児3名を、取引所の下の細やかな家に「小樽孤児院」の看板を掲げ育児事業を開始したと記録されている。

中島にとって強い感銘を与えた岡山孤児院など、当時の孤児院の多くは仏教やキリスト教などの信仰に根差した思想から設置されるものが多かったが、中島に関する資料が少なく宗教思想が根底にあったのかは不明である。ただし、当時の中島の写真（中島と三代目院主となった輿水と撮影されたもの）をみると、中島の左腕には数珠をかけていることがはっきりとわかるものがある。特別の宗教観があったのかは不明であるものの、仏教やキリスト教に通底する「徳」⁵⁾がうかがえる。



(写真5) 中島と輿水

出典：『小樽育成院創立百二十周年記念誌』p26より転載

(3) 院児の増加と移転

1898（明治31）年6月に3名で始まった院児数は同年度末に13名、1899（明治32）年度末には22名、さらに1900（明治33）年度末には36名と院児が増加し、新たな院舎を必要とするも資金繰りに大変な労苦があったことが記されている。1904（明治37）年の日露戦争勃発により、さらに寄付金集めが困難となる中で資金集めに奔走した中島は心身ともに限界をむかえ健康を害して、1905（明治38）年には経営を引き継ぎ盛岡に帰郷している。経営を引き継いだ赤塚もわずか半年後に病気のため院主を辞した。

記録誌（p25）では、

孤児院の人数は設立当初から毎年増加傾向にあった。つまり、それだけ多くの孤児・貧児・捨子が、当時の小樽にいたということである。経済都市として日々拡大していく街の陰の部分に目を向け、当時の小樽にもっとも必要とされていたはずの社会事業をたった一人で立ち上げた中島、そしてそれを引き継ごうとした赤塚の志は、大変崇高なものであったと言えるだろう。

と評しているが、崇高な志の根幹にどのような思想があったのか、あとを引き継ぐこととなった三代目院主の輿水伊代吉（1872～1941）の実践を丁寧に整理する中で考察してみたい。

(4) 三代目院主・輿水伊代吉

中島・赤塚の跡を継ぎ、三代目院主（のちの初代小樽育成院院長）輿水伊代吉は山梨の武田家家臣の流れをくむ父正の長男として生まれ、山梨農学校に学び、国漢と神学を得意とし神道を宗教とした快活な性格であった。地元で商店を営んでいたが26歳の時に新天地北海道で事業を起こす、1898（明治31）年に渡道し、

函館・帯広・旭川で商人として働いたのち、印刷出版業を志し、1905（明治38）年に小樽活版所に勤務していた。事務兼校正の他に集金の仕事も行っており、その集金先の一つが小樽孤児院であった。孤児院は活版所に未払い金があり、それを輿水がたびたび集金に訪れていた（記念誌p26）。以前より社会事業に関心があった輿水は、一度院の状況を見た後は毎回孤児のためにお菓子を携えて集金に来た。赤塚は輿水のその優しい人柄と心遣いを見込んで、是非にと懇願し、1905（明治38）年11月、小樽孤児院の事務員として輿水をむかえた。赤塚が退職したのが1906（明治39）年1月であり、輿水が働き始めて3か月後の事であった。院主となるのは相当の重圧があったことが推測される。

『小樽育成院三十年誌 育成』p3～4（小樽育成院1928）には、当時の輿水の当時の心情が記録されている。

当時一事務員であった私は突然此の難問題にあって全く唾然として了ひました。子ども達のことを思う時、又財政の乱脈を考えた時、私の頭の中には驚き、怖れ、悲しみ、・・・そうした感情が走馬灯の様に駆け廻るのでした。然しそうした場合に私としてどうして同院の一切を棄て去ることが出来るのでせうか。又一旦それ迄に体系づけられた救済機関を一朝にして廃滅に帰するという事は社会的にも問題であると思ひました。それで私は兎も角事業場最も密接な関係のある当時の小樽警察署長鈴木警視に善後策を諮ったのでございます。ところが幸いにも同氏は種々有益なる助言を与えられ、又大いに鞭撻される所がありましたので、私は断然意を決してわずかながら私財と共に身心を挙げてこの事業に捧げんことを誓ひ此処に院務を継承して其の整理改善に起ったのであります。私はその当時全く私の背後から「死と共に、死を決せよ、責任を思へ」そうした叫びが追かけて居るのを明瞭と聞いていたので御座います。

院務を引き継いだ際の社会的責務としての考え方を見てとることができよう。その後の輿水の丁寧かつ熱心な取り組みは、小樽の人々の中にそれまで抱いていた「救済事業」に対する猜疑的な視点を改めさせ、賛助者も増えたと記録されている。

(5) 院児の自立に向けて

これまでの孤児院の寄付金や義援金、行政からの補助金、皇室からの下賜金など院の外から与えられる収入に依存した運営がなされていたが、輿水は生産事業に着手し、「授産部」「手工部」「農業部」「機業部」「裁縫部」等を立ち上げ授産部門を設立した。このことは運営面での工面という側面だけではなく、院児たちの

情操教育と貯蓄心を養い、卒業後の自立支援を見据えたものであったと記されている。

当時の孤児院では院児が筆墨や鉛筆などを売り歩く「行商」があったものの、世間の人々の同情心に訴えて不要ととれる雑品を売り歩く、いわゆる「マッチ売りの少女」のようなやり方では院児たちの自尊心は育たず、かえって自らの境遇を際立たせるのみであった⁶⁾。

どうかして寄附行為にばかり抛らなくとも院の経済を立てていきたいと思っておるのです。第一には職業の趣味を悟らしめ、一面自ら働いて自ら食ふのであるという自信を得せしめ、我等もまた立派な国民の一人であるぞという信念を得させ、ややもすれば陥りやすい孤児という僻みや自棄から救い上げたいと思う信念から、各自の嗜好を基本に様々な仕事をさせておりますが、お陰で好成绩を挙げているのは自分の尤も満足するところなのでございます。

興水の信念は現在の社会福祉における支援の思想に通じるものである。不遇な環境に置かれた人々に、国民の一人として、固有な大切な存在として自尊感情を持ち、その人らしい自立に向けた力を獲得できる支援を進めていくという、強い志しと思想を見てとることができる。

興水が取り組んだ収益事業にはさまざまなものがあるが、私立施設の運営基盤は脆弱であり、1910(明治43)年に内務省より許可を得て財団法人組織への改編がなされている。また、その際に、孤児という名称を避け、「財団法人小樽育成院」と改称されている。

この名称変更について興水は北門新報の記事の中で以下のように語っている⁷⁾。

できる限りは人の手を借りず足りない所はやむなく篤志家の寄附によってやっていますけれども、篤志家といっても寄附する人より寄附される私がお一層の苦痛なのです。事情を訴えるにしても泣き言にならないように、又、向こうの同情を惹かなくては寄附を得ることができません。私が孤児院を育成院と改めたのもその所以であります。孤児院というと収容されている児の凡てが自身を暗く惨めに思わせる、心理的に良い影響があろう筈がありません

(大正6年2月27日 北門新報「献身的事業の孤児育成(一) 興水院長の談」)

この談話の中に、施しや哀れみではなく、どの児も人格を有した個として、人の自尊感情や尊厳にも思いをはせる興水の思想をよみとることができよう。

(6) 養老部の設立

小樽には1908(明治41)年に「小樽養老院」が設立されていたが、この小樽養老院が1910(明治43)年に解散となり、その際育成院で小樽養老院にいた6名を引き受けたと記されている⁸⁾。

これ以降、数名の高齢者と子どもたちが在中するようになり、正式に定員60名の「養老部」を設け養老事業を開始したのは1927(昭和2)年である。これにより育成院は育児・養老を一手に担うこととなった。

このころの興水は社会福祉事業の長老として全国の大大会や会合に招かれ多忙な日々を過ごしていた。そのような中、1941(昭和16)年10月28日に68歳で逝去した。

その後は戦争の影響を受けながらも1945(昭和20)年、終戦を迎え、国の社会福祉政策が見直され、1947(昭和22)年の生活保護法の制定、児童保護法の発布により、育成院は名前の由来となった育児事業を廃止し、養老事業を行う施設として再出発をきった。当時育児部にいた児童たちは岩内教護院に転院となった。創設以来の育児事業から養老事業への大転換がなされたが、「育成院」の名称は今日まで引き継がれている。



出典「社会福祉法人小樽育成院創設110周年記念DVD」
(平成20年6月)より転載

(7) 戦争と施設の変化

興水の逝去の後、敗戦をむかえたが後任院長未決定のまま、1945(昭和20)年には外地からの引揚者の収容の委託を受けている。引揚者の心の荒み、生活の逼迫で院内の空気も荒廃甚だしく、襖・障子等破壊して焚いたり、物品を持ち出し売り払う等珍しくなくなり、院の経営をさらに困難なものにした。110周年記念DVDにはその当時の引揚者の姿が記録されており、戦後の混乱期における社会福祉施設の現状がみてとれる。

こうした院の荒廃、存廃論の渦巻く中、1947(昭和22)年4月10日、過去50年にわたる施設の育児部を廃止せざるを得なくなり、養老のみの施設となり育成院の性格を大きく変えるにいたっている。



出典「社会福祉法人小樽育成院創設110周年記念DVD」
(平成20年6月)より転載

福森理事長は育児部の廃止に関して、「GHQから「荒廃している施設の現状は子どもたちの育つ環境として適切ではない」との厳しい指摘があり、子どもたちは岩内救護院への転院となり、養老部が残った」と話しておられる。



出典「社会福祉法人小樽育成院創設110周年記念DVD」
(平成20年6月)より転載

II. 考察

中島武兵が孤児救済に取り組んだきっかけには、小樽という経済都市(当時の経済都市)が生んだ影の部分が理由の大きな部分を占めている。中島は捨て子との出会いの中で社会の中で生活困窮している人々の現状に触れ、小樽孤児院(のちの小樽育成院)の開設に着手した。その後を継いだ興水伊代吉は児童を一人の人格を有する存在ととらえ、狭隘な院舎でありながらも興水夫妻をお父さん、お母さんと呼ぶ家庭的な雰囲気⁹⁾の中で支援を心掛けていた。施与ではなく収益事業をおこなうことで、手に職をつけ自立できるスキルの獲得を目指す支援であった。

孤児や生活困窮者対策ののち、必要に迫られて養老事業を展開しているが、そこには「人権」や「社会正義」に通じる、利他的思考を見てとることができる。

興水は『三十年誌』のなか「三十年の春秋を顧みて」

において、「本院のもとより社会事業の一端として倦むことなく三十年の春秋風雨を辿って参りましたが、本院の事業は勿論華やかなものではありませんでした。あくまでも消極的、縁の下の力持ちで御座います。然も尚私達は本院の事業の重要さを自覚致します。事業の消極性—そこにはむしろ気づかざる重要さと苦心を見出さずにはいられないからでございます」

興水は児童や家族が社会的な自立を図るためのプラットホームの役割を担い、さらには就労の場、家庭生活を営む場として、生活そのものを支える役割を担ってきた。このような興水の情熱と運営方法は現在にも引き継がれていると思われる。

現理事長の福森氏に、引き継がれている理念は何かを尋ねると「権利擁護」であると即答いただいた。

III. おわりに

北海道においては当初から養老事業のみを行うというスタイルは定着しておらず、養老事業の源流は、小樽育成院の歴史からもわかるように、生活困窮者対策としての医療、保護収容(孤児含む)が出発点の一つであるということがわかる。大正14年には最初から養老事業のみで運営する札幌養老院の創設がなされており、今後は養老事業の比較検討を行うなどし、福祉現場の経験的積み重ねの中にある社会福祉実践者たちの思想を再評価する検討を重ね、根底にある「福祉の思想」について析出する研究に取り組んでいきたい。

謝辞

コロナ渦のなか、施設内では面会等に制限がある中で、貴重な育成院の歴史の確認作業にお付き合いいただいた福森理事長に心から感謝申し上げたい。

この研究は、「さつばろ慈啓会共生(ともいき)助成事業」令和2年度の助成を受けたものである。

注)

- 1) 社会福祉法人小樽育成院『小樽育成院創立百二十周年記念誌』(2018) p.15
- 2) 前掲書 p.15 グラフ1及びグラフ2
- 3) 前掲書 p.14
- 4) 前掲書 p.24
- 5) 修養によって得た、自らを高め、他を感化する精神的な能力」(大辞林)。「道をさとした立派な行為。善い行いをする性格」(広辞苑)と定義している。
- 6) 前掲書 p.28
- 7) 前掲書 p.33
- 8) 前掲書 p.31
- 9) 鳥羽美香(2014)「北海道の養老事業の展開と今日的意義」『文京学院大学人間学部研究紀要』vo.15 p.142

参考文献

- ・濱田智恵美（2013）「小樽育成院育児部の入院概要からの考察」『明治学院大学社会学部附属研究所年報』第43号 pp55～68
- ・濱田智恵美（2015）「小樽育成院養老部に関する研究—戦中戦後の入院者の状況を中心に—」『明治学院大学社会学部附属研究所年報』第45号 91～99
- ・三好 明（1969）『北海道社会事業史研究』敬文堂出版部
- ・小樽育成院（1928）『小樽育成院三十年誌』
- ・小樽育成院（1998）『小樽育成院創立百周年記念誌～永遠に』
- ・小樽育成院（2008）「社会福祉法人小樽育成院創立110周年記念～永遠に」DVD
- ・小樽育成院（2018）『小樽育成院創立百二十周年記念誌～永遠に』

受付：2020年11月30日

受理：2021年3月9日